

No.159

# 公民館だより

平成29年3月

宮津市字由良  
由良の里センター内  
由良地区公民館

## 在職十年を振り返る(十)

由良地区公民館長 枝川隆亮

◎平成二十六(2014)年

平成二二年

801枚

○「北前船資料館」が三月廿日に安寿足湯内にオープンしました。

平成二三年

741枚

た。由良湊の歴史や、由良の船頭衆の活躍を船絵馬の写真やパネルを展示し、詳細に紹介しています。また中央には1/15の北前船の模型を展示しています。

平成二四年

726枚

平成二五年

671枚

平成二六年

810枚

平成二七年

524枚

となっております。

◎平成二十五(2013)年

○平成二十五年十月に発足した「由良のオリーブを育てる会」が上石浦地区由良川沿い国道筋に「由良オリーブ工房」をオープンし事務所として使用しています。

○昭和四一(1966)年から故四方寿朗館長が始められた由良ヶ嶽登山はこの年で四九回目を迎えました。近年の登山証明書の発行数(年間)は

平成二〇年 662枚

平成二一年 1010枚

○「子どものびのび体験活動事業」として長年、クリスマスケーキづくりを子どもたちに体験

させてきましたが、家庭での「餅つき」の風習が無くなりつつある現在、日本古来の伝統行事をぜひ子どもたちに体験させるべくこの年に実施しています。ほとんどの子どもたちは経験がなかったが、「初めてだったので難しかったが丸めるのは簡単だった。楽しかったし、おいしかった。」「毎年ケーキづくりだったので、たまには餅つきもいいと思えました。」「餅つきの感想は、みんなが楽しく作れて良かったです。餅をつくるとき杵が重かったけどまあまあ良かったです。また、自分でついた餅を食べたいと思ったし、良い経験になりました。」と感想を述べてくれ、好評だったので二十八年度も実施しています。

◎健康広場ウォーキング

この年から、丹鉄片道二〇〇円切符を利用し、地区外へウォーキングを実施しています。

五月 福知山城 十月 コウノトリの郷公園を実施しています。地区内のウォーキングは毎月一回実施を目標にしています

が地区内より地区外に出るほうが参加者が多いため、この年から年二〜三回は実施しています。

○小学校が閉校になり二年ごとの開催になった運動会を九月二十七日に開催しています。二日前まで雨が降っていて開催が心配されたが当日は快晴に恵まれ、地区民の触れ合いや交流の場が提供できました。

◎平成二十八(2016)年

◎健康広場ウォーキング

二月 元伊勢内宮外宮

五月 才の神の藤

地区外へウォーキングを実施しています。

○講師に能勢健吉氏(セバード由良在住・宮津市調停協会会長)を迎えて、五回に分けてパソコン教室を開催しました。受講者は八名、ポスターづくり、名刺づくり、エクセル数式の使い方などを勉強しました。

(完)

# 行事報告

## ◎グラウンドゴルフ大会

(団体戦)

十月二十二日(日) 午前九時

午前十一時三十分

会場：はまの子グラウンド

選手：男子十九名、

女子十一名

役員：五名

参加チーム数：六チーム

天候は曇り、風がなくゴールポストが倒れる心配がなかったのでゲームが進めやすくなりました。

昨年は、オリーブ祭と日にかち重なりましたので、今回はオリーブ祭の一日前の午前中に実施することで参加しやすい条件にしました。結果、オリーブを育てる会には参加していただきましたが、他の方の参加は例年とあまり変わりませんでした。安寿の里でチームを作っていただけで参加していただき、にぎやかにしていただいたことが成果だったと思います。

主事 千坂 幸雄



結果は次の通りです。

優勝：オリーブを育てる会

(野村孝行さん、糸井

治孝さん、中西 忍

さん、川崎 直さん、

山田耕助さん)

準優勝：ミマの会

第三位：よろず屋

個人最優秀賞

男子：中西英貴さん

女子：濱野尚子さん

## ◎由良地区文化祭

十一月六日(日) 午前九時

から午後三時

会場：由良地区公民館

来場者数：約四百名

役員：二十九名

由良自治連合会共催



十月三十日(日)に公民館全役員で会場準備を行いました。約一時間半

十一月五日(土)午後二時から展示物の受付を行いました。生け花、絵画、帆船模型、ミニチュア等、お願いしましたらこころよく展示していただきました。また、写真クラブにもお願いいし、いつもより多く展示していただきました。消防団操法大会の賞状や盾も展示しました。幼稚園、小学校、中学校の作品や書道クラブの作品、そして、布飾り教室のひな人形、着物、帯、南天飾り、カバンなど、オリーブの絵、パッチワーク、

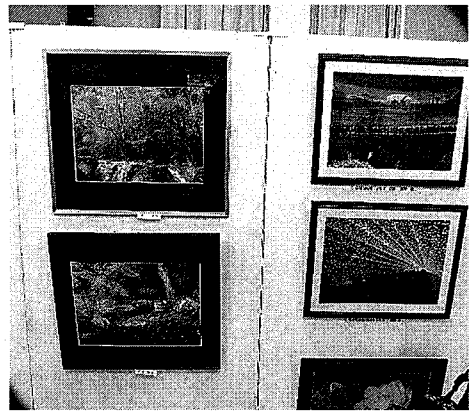


十一月六日(日)いよいよ文化祭当日、天候は曇り時々雨、風のきつい日になりました。午前八時から文化部でテント張りを行いました。テントが飛ばないように柱に重り(砂袋)を付けました。

農作物やオリーブ茶などの販売場所を栗田中学校の資源回収があったり風が強いこともあり、文化部でテ

はまなす苑の作品、書道教室の作品などが会場全体に展示されました。

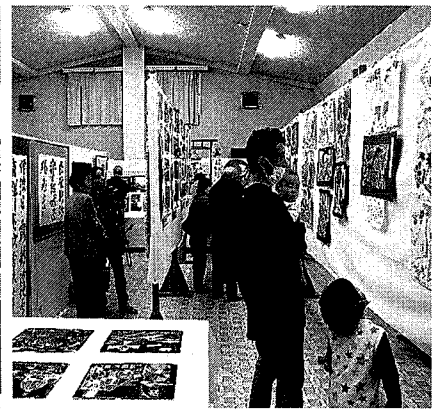
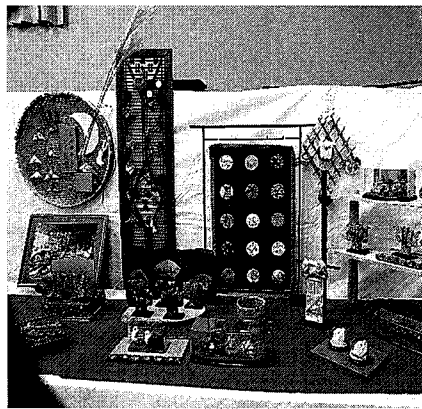
出展数は合計二百五十七点の作品が集まり、昨年の百七十八点を大きく上回りました。



ントを二張りはって利用していたできました。

午前十時からうどん・バラ寿司の販売が始まり、展示品を鑑賞する人も増えてきました。バザーやコーヒーストップも盛況でした。

皆様の協力で例年どおりの賑やかな文化祭になりました。お礼申し上げます。



◎しめ縄作り講習会

十二月一日(木) 午前九時

から午前十一時三十分

会場：由良地区公民館

講師：三嶋安夫氏

参加者数：男性六名、

女性七名



三嶋さんは毎年しめ縄を作っておられますが、その技術は卓越しています。毎年近所の方に頼まれていると聞きました。サンプルを用意していただき、わかりやすく指導していただきました。おかげで終了時間には初めての方も上手に藁をよって良い作品を仕上げる事ができました。

自分が作ったものには愛着があり、新年のお飾りがいつもより効果を発揮しているようでした。

◎子供料理教室(餅つき)

十二月十一日(日) 午前十時

から午後一時

会場：由良地区公民館

〔参加者〕

小学生十九名、幼稚園児三名

親四名

講師：宮津市食生活改善推進委員五名

子供料理教室は十二回を迎え、今年度も昨年度同様に食改の方の指導を受け、由良子供会連絡協議会共催で平成二十八年度「こどものびの





び体験活動」事業として「子供料理教室」を開催、今年度は昨年に続き二回目の「餅つき」に挑戦しました。

子供たちの集まりを心配していましたが、子供会役員の皆様の協力で多くの子供たちが参加できました。

始める前に館長と子供会連絡協議会会長のあいさつ、次に、食改の方の紹介と「手洗い」等、衛生面の指導をしてもらいました。

二つの班に分かれて活動開始。まず、一班が餅つきに挑戦し、つけた餅を二班が丸めました。二つ目の蒸せたもち米は、二班がつき、一班が



丸めました。来ている子供の家で餅つきをしているのは一軒でした。楽しくついたり丸めたりすることができました。二確で約二百個丸めました。

大根サラダ、みかん、お茶を用意してぜんざいをいただきます。 (安倍川もちを食べた人もいました。) 多めに作りましたのでお替わりをしておなか一杯食べることができました。5・6年生は感想文を書き、しばらく卓球をしたりして解散しました。

来年度はクリスマスケーキ作りの予定です。餅つきの年とクリスマスケーキ作り

の年を交互にするのがよいようです。

### ◎新春囲碁大会

一月七日(土) 午前九時

から午後三時

場所：由良の戸 (安寿足湯) 千軒長者の館

九名参加

由良囲碁同好会共催

館長あいさつの後、開始。

結果は次のとおりです。

優勝：熊田良雄さん

準優勝：木村卓雄さん

第三位：今西秀夫さん

昨年度、熊田さんは二位、今西さんは準優勝でした。二人はいつも上位に入る実力者です。木村さんは昨年度優



勝の飯澤さんを破り準優勝を勝ち取りました。

囲碁は脳を使い、人との交流ができる歴史あるゲームです。どんなことでもですが、昔から行われていて今も消えていないものには、他にはない良いものを持っています。若い人たちに普及していければと思います。

### ◎巡回ニュースポーツ教室(ユニカール)

一月八日(日) 午前十時三十分

から午前十一時三十分

場所：はまの子体育館 参加者数：十九名参加

ウォーキングの後、体育館に集合し、しばらく休憩



しました。館長のあいさつとスポーツ推進委員(三名)のルール説明後、競技を開始しました。

グループ分けは女性と男性の混合チームを六チーム作りしました。六回の点数を合計して勝敗を決めます。二チームと対戦しました。

しばらくは慣れないこともあり、コントロールに苦しみましたが、みなさんずいぶん上達して楽しむことができました。

宮津市ユニカール大会にも参加できればと思います。

◎由良地区健康広場ウォーキング

○十一月ウォーキング  
十一月二十日(日)

地区内ウォーキングを開催「森が鼻コース」約三キロメートルをウォーキングしました。

男子二名、女子二名の参加

由良地区公民館から駅前、踏切を渡って森が鼻へ、線路沿いを歩いて踏切を渡り、松原寺横から由良地区公



民館に戻ってきました。

天候は、曇り時々雨、寒さはあまり感じませんでした。今年度初めての冬時間開始(十時開始)でしたので、開始時間をはっきりしなかつた人がいたと思われまます。少数精鋭でしっかりと歩かれました。

○十二月ウォーキング  
十二月四日(日)

地区内ウォーキングを開催  
男子七名、女子七名の参加

天候は晴れ、由良地区公民館から浜に出て、海を見ながら脇まで行き、稲荷さんで全員集まり、由良内の道を歩いて公民館に戻りました。

今回は、天気も良く、行事

が重なっていないこともあり、多くの参加を得ることができました。

○一月ウォーキング  
一月八日(日)

由良地区四社詣りウォーキングを開催、約五キロメートルをウォーキングしました。

男子七名、女子十一名の参加  
天候は曇り、気温五度、風は微風、今回は、由良の神社のお参りも兼ねてウォーキングしました。

体育館に集合、館長のあいさつ、準備体操をして出かけました。奈具神社では水で手を清めて参拝しました。鯉が池で元気に泳いでいました。由良神社では大川神社の石碑や新宮涼庭の碑に目を止めました。荒神社、玉司稲荷神社は浜野路公民館裏にあります。照国稲荷神社は由良川河口付近(由良港)にあります。由良脇から宮本、浜野路、港と由良を一周しました。由良には神社が十以上あると聞いています。



【訂正とお詫び】

前回、第百五十八号、パソコン講座の講師名が間違っていました。正しくは、能勢健吉氏です。ここにお詫び申し上げます。

# 「一瞬のいのち」を生きる

栗田小学校 校長 辻村 真人

私は浄土宗の僧職資格を三十年ほど前に取得し、山口県にあります妻の実家のお寺

に行った時などには、衣や袈裟を着けてお手伝いをさせて

頂くことがあります。また必要に応じてお檀家の皆様に法

話をさせて頂くこともあります。そこで今回はお釈迦様のお話です。

あるとき、お釈迦さまが三人のお弟子さんに尋ねられました。

「あなたは、あとどれくらい生きられると思いますかか？」

一人目のお弟子さんが答えました。

「大体、人々の寿命の平均を計りますと五〇歳（お釈迦さまの時代は二千年以上前の頃）

程ですから、そこまでは生きられるかと思えます。」

「弟子よ、お前はまだ本当のことが分かっていますね。」と、お釈迦さまはおっしゃいました。

二人目のお弟子さんが答えました。

「五〇歳どころか一、二年先の事でもどうなるか分かりませんが、今の体の調子で考え

ると一ヶ月程は大丈夫かと思えます。」

「お前もまだ本当のことが分かっていますね。」と、お釈迦さまはおっしゃいました。

最後に智慧第一といわれた舍利弗（しゃりほつ）が答えました。

「阿吽（あうん）の呼吸の間

のいのちです。吸った息が出なければ、そこでいのちは終わりです。」

「その通りである。いのちというのは、吸った息が出るのを待たないほどの長さでしか本来ないのだ」と、お釈迦さまは説かれました。

『四十二章経』

「阿」は「吐く息」、「吽」は「吸う息」のことです。吐く息、吸う息、どちらかが途切れた時、いのちは終わります。

人の人生に確かに決まった長さはありません。人は「一瞬のいのち」を生きているのです。一瞬一瞬のいのちの積み重ねを生き、それが生涯となるのです。

現代では相田みつをさんなどが次のような文章を記して一日一日を生きる大切さや素晴らしさを記しておられます。

『四十二章経』

「阿」は「吐く息」、「吽」は「吸う息」のことです。吐く息、吸う息、どちらかが途切れた時、いのちは終わります。

人の人生に確かに決まった長さはありません。人は「一瞬のいのち」を生きているのです。一瞬一瞬のいのちの積み重ねを生き、それが生涯となるのです。

現代では相田みつをさんなどが次のような文章を記して一日一日を生きる大切さや素晴らしさを記しておられます。

『四十二章経』

日日は好日

相田みつを

ふつても てつても

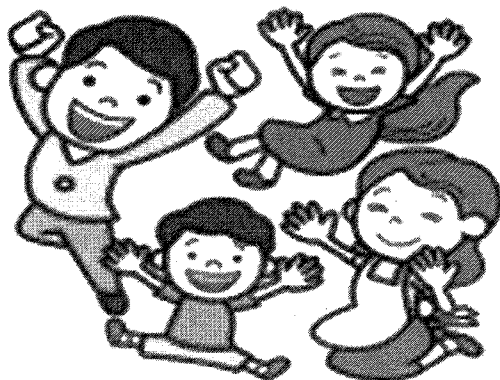
日日は好日

泣いてもわらっても

きょうが一番いい日

私の一生の中の

大事な一日だから





# 子供料理教室に参加して

五年 野村 心虹

今日、子供料理教室に参加して驚いたことがあります。一つ目は、杵がものすごく重かったです。二つ目は、餅がとても丸めにくかったです。ひびが入ったりしてとても丸めにくかったです。お餅をつくの初めてで、「昔の人はこうやって餅をついていたんだなあ。」



と思いました。

餅を食べるとき、ふだんはあまり食べないお餅だったので自分でもびつくりしました。調理をしている食改さんがサラダも作ってくれて、これもおいしかったです。

楽しい思い出が作れてよかったです。

五年 室澤 亜紗

今日、由良の里センターで餅つき大会がありました。私はこのことをすっかり忘れていました。大急ぎで準備をしました。午前十時くらいに着きました。心虹ちゃんが来ていたので安心しました。なぜ来たのか聞いてみると

「お父さんに言われて来た。」と言っていました。

二班に分かれました。私は一



班でした。最初はついて、最後は丸めました。ついた餅やサラダがおいしかったです。

六年 川崎 紳太郎

今日、由良の公民館で子供料理教室がありました。

今年は、去年と同じで餅つきをしました。

二班に分かれて、丸める班と餅をつく班に分かれました。

僕は二班で、まず、もちを丸めることになりました。餅にひびが入ったけれど、わりときれいに丸めることができました。

その後、餅をつきました。

自分の前の人が、上手につい

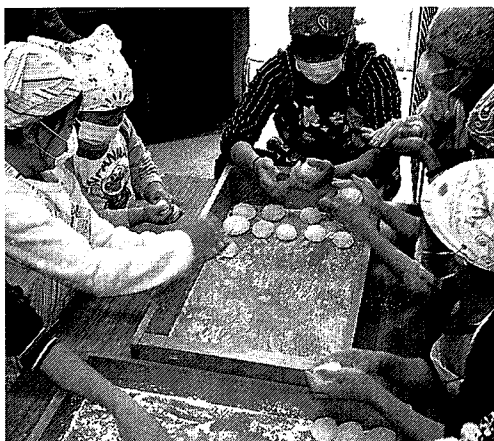
てくれていたから、楽でした。それから、餅をぜんざいにして食べました。とてもおいしかったです。ぼくはこれで最後だけれど楽しかったです。

六年 中西 歩実

今日、里センターで子供料理教室がありました。去年からケーキ作りから餅つきになりました。ケーキ作りがしたかったので少し残念だなと思いました。杵はやつぱりすごく重かったです。

餅を丸めるときは

「丸い方を上にして置いたらいい





「いよ。」  
と教えてくれました。家で丸めたことはあったけれど、楽しかったです。最初はすごく熱かったです。  
昼ご飯は、サラダとぜんざいを食べました。お替わりはしなかったけれどすごくおいしかったです。サラダが一番おいしかったです。自分は餅をついて丸めたんだけど、ぜんざいもすごく甘くておいしかったです。



六年 升田 康太

今日、由良の公民館で餅つきをした。僕はぜんざいを食べるのが楽しみだった。

僕は、一班で先に餅をつきました。けっこう重かったです。終わってぜんざいを食べました。「うまい。」

と叫ぶくらいおいしかったです。

僕は、餅を六個食べました。サラダもおいしかったです。

六年 山田 遥加  
今日、由良の公民館で子供料

理教室(餅つき)がありました。一昨年はケーキ作りだったけれど去年から餅つきになってうれしかったです。私はお餅の方がおいしいし、ついたりこねたりするのも楽しいからです。一班と二班に分かれて、つくのこねるのの二つを順番にしました。

触ると少し温かくて柔らかかったです。つくときには杵が少し重かったけれど、おもいっきり

「ドンッドンッ。」  
と上手にできました。

いよいよ、自分たちのついた餅を食べました。きな粉餅の人もいたけれど私はぜんざいにしていただきました。柔らかくておいしかったです、お米のつぶつぶしたものが少し残っていて、それも良かったです。

今年で私は最後だけれど来年も餅つきを体験してほしいです。





# 成人式を迎えて

## 白 矢 貴 大

平成二九年一月八日、この度私達は無事、成人式を迎える事ができました。朝から降り出した雨の中、会場である宮津会館

に行くとき懐かしい友達との再会の喜び、成人式という大きな式に参加することへのワクワク感が、私の胸をいっぱいにしてくれました。久しぶりに再会した友人達との思い出話や夢に向かっている話を聞き、嬉しさと寂しさを同時に感じ、自分たちが大人へと成長しているのだと実感しました。

私は今も昔も楽しいと思いつながら生きています。そう感じられるのは家族をはじめとした多くの方々に支えられ、見守ってもらい、愛されているからだ。今になって強く感じています。私は二十歳になり大人への仲間入りを果たしたものの、まだまだ

だ未熟ものです。きつと、これからも多くの人に迷惑をかけると思いますし、支えてもらうと思えます。しかし、感謝の心を忘れず、誠実に、これからは周りの方々から頂いた愛情を私が多くの人に与えられる大人へと進歩する為に努力をし、準備を整えていきます。

また、海と山に囲まれた自然豊かな私の故郷である由良も、今の私があるのには欠かせない大切な大好きな場所です。いつまでも私の大好きな由良であることを願い、いつの日か故郷に何か貢献出来る人になれるよう更に成長していきたいです。



# チーと知っ得

奈具神社は脇地区にある神社、祭神は豊宇賀売命で五穀豊穡の神さまです。

創始年代は不祥ですが、再建は一六九一（元禄四）年八月、醍醐天皇の御代の延喜式人名帳に記載されている三三三社の一社です。

昔、奈具神社は奈具峠付近にありましたが大洪水で流失し、集落とともに現在の場所に移り祀られたといわれています。

現在の本殿は一七九四（寛政六）年に造営され、その後も度々修復を重ね今に至っています。

この神社、再建の頃こんな風景を計算して建てられたのでしょうか？

元旦に初詣して振り返りますと、本殿・拜殿・参道・大鳥居の一直線上に初日の出を拝することが出来ます。勿論天候や時刻によりますが大鳥居の上にお

日様が乗っているのです。今から何百年昔、こんな風景を想定して遷座されたとしたら凄いことだと思います。カメラ愛好の方々一度機会があれば訪ねてみてください。

飯澤登志朗  
（写真提供 小室秀雄氏）



# バレーボール大会に参加して

吉元 誠 司

日頃は、公民館行事にご協力をいただき、誠にありがとうございます。昨年四月から、新たに宮本地区の分館長を仰せつかりました関係で、特に宮本地区の皆様には色々無理難題をお願いしていることに対し、紙面をお借りして、感謝申し上げます。

さて、公民館主事から「バレーボール大会に参加して」と題して、公民館だよりに寄稿の命があったのは昨年のことです。

諸般の事情で先延ばししているうちに年が明け、間もなく次回のバレーボール大会の段取りが始まる時期に差し掛かっている中、前回のことを書くのは時機を逸しておりますが、普段感じていることなどを少し書いてみたいと思います。

由良地区においては、年間を通

じて、バレーボール大会をはじめとしてソフトボール大会や運動会、最近ではグラウンドゴルフなど、様々な年代の方々が一緒に楽しめるイベントが多数催されています。

地区の皆さんが、得意、不得意にかかわらず、一緒になって参加できるイベントがこれほど沢山あるのは、一般的には非常にいいことだと思っています。

しかし最近では、イベントにお誘いをして、なかなか都合がつかず、イベント直前まで参加者集めに奔走しているのが実態となっています。また、高齢化に伴い、気持ちは参加したいが、体がついてこない方々も増えてきたように思います。

私がバレーボールに初めて参加させていただいたのは、もう十

年以上前のことになりました。

きっかけはよく覚えていませんが、由良地区転入者である私に地区の方が声をかけていただいたのがきっかけだったように思います。

体力にも自信があり、バレーボールの経験も多少ありましたので喜んで参加し、以来、これまでに地域の皆さんと楽しく続けさせていただいています。

さて、前回のバレーボールでは当地区が男子の部で久しぶりに優勝させていただきました。

優勝を狙って事前に作戦会議を行ったわけでもなく、秘密の特訓をしたわけでもありませんが、優勝し、皆さんと一緒に喜びを分かち合えたことは格別でした。

優勝メンバーは、宮本地区が誇る二十代から六十代までの精鋭ですが、基本的メンバーは十年以上前から不変です。

私なりに前回の勝因を分析すると、ベテランを脅かす若手の台頭と、従来からのベテラン選手らの和気あいあいとしたゆるい連

携ではなかつたかと考えます。

バレーボールはソフトバレーに変更となり、よりレクリエーション性がアップしたと思います。

とかく勝ち負けが先に来ると、参加を躊躇する方もあると思いますので、気楽な気持ちで参加していただくことが、重要ではないでしょうか。(運よく優勝に絡めば自然と盛り上がります。)

公民館の主催するイベントは、軟式野球がソフトボールに変更されたように、時代の流れにに応じて、徐々に変化しています。

こういったイベントが、今後も、地区相互間の交流、懇親の場として、多くの方に参加していただくためには、より柔軟な仕組み作りが大事になっていくと思います。

今後とも、公民館行事へのご支援、ご協力をよろしく願います。

# 老人(としより)の戯れ言

飯澤 登志朗

由良地区の高齢化は宮津市でも上位を占めている。

小学校閉校以来子供たちの明るい声を聞くことがない。

某所で幼児の声がうるさいから保育園開設に反対運動が起き開園中止のニュースを見ると反対運動を起こした人たちの自分本位の考え方に違和感を覚える。

幼児の声がうるさい?そんなことは当たり前でむしろ羨ましいと思うのは私だけだろうか。

最近、佐藤愛子「九十歳何がめでたい」、五木寛之「嫌老社会を超えて」と老人社会を考えさせられる本を読んだ。読みながらわが意を得たり、ウンその通りや、とひとりで納得しながら読んだ。

その一部「日本人総アホ時代」内容は、スマホである。スマホで何でも分かる。ニュー

ス、天気予報、カメラ、辞書、計算等々あらゆる情報も分かる。小学生の孫でも知っているのに老人には分からない言葉、 아이폰、ガラケー等々。

人間がみんな調べたり考えたり記憶したり努力しなくてもスマホで答えが出てくる、日本人総アホ時代がやってくるということ。

また「嫌老社会を超えて」には、平均年齢が世界一の長寿国になった。しかし超高齢者が増えたことはそれだけ「死に近い人間」の数が多くなったことを意味する。

そして二つの提言として、一つ目は一定の収入のある人は年金の返上、健康な人は何歳で有ろうと働く、年金をもらわないと「損」と考えるのではなく社会に還元

するのだ。

二つ目は「選挙権の委譲」高齢者があえて後の世代に選挙権を譲る度量をもて……。

実際にはもっと丁寧に細かく書かれているがこの時代の荒波を乗り切って勝ち残るために必要なのはやはり若い発想や行動力である。若い世代を信頼し全面的に任せる。老人は別のところで頑張ればよいということだ。

由良地区の現状を考えて見よう。

先に述べた子供たちの声は聞こえないし、外へ出て子供に出会うことは稀である。空き家も多くなった。これは由良地区だけではなくことは承知しているが。

今、由良地区で中心になって頑張ってくれている人たちは定年後の人生を過ごされている人たちである。

六五歳から高齢者となっていて六五歳で自分が老人と思う人は少ない、何歳になろうと年寄り扱いはしてほしくない。

しかし、高齢者割引や医療費助成が無くなったらもつと老人を大切にしろと文句が出るだろう。

自分に置き換えてみよう。

チョットした段差につまずくし、物忘れは度々、人の名前が出てこない。

気持ちは現役で自分の息子や娘にまだ世話にならんと力んでみても体や頭の衰えは確実に進んでいることを自覚しなければならぬ。車の運転もいつ辞めようか、自問自答を繰り返しながら決心がつかない。

恰好良くいうと年寄りには年相応に、元気で生きていたい。

こんなことを考えるのも歳を取ったから?、老人(としより)の戯れ言と笑って聞き流してほしい。

# 古代日本史 II

## 中西 衛

天智九年（六七〇）の斑鳩寺  
 炎上は上宮王家の滅亡からわず  
 か二七年後だった。

しかし、再建、法隆寺は  
 一三〇〇年以上にわたり、大火  
 に遭わず、今日に伝わった。

そして今、世界にも類例のな  
 い仏教美術の宝庫である。古代  
 史、仏教史、美術史、建築史、  
 染織史などは法隆寺を抜きに語  
 れない。

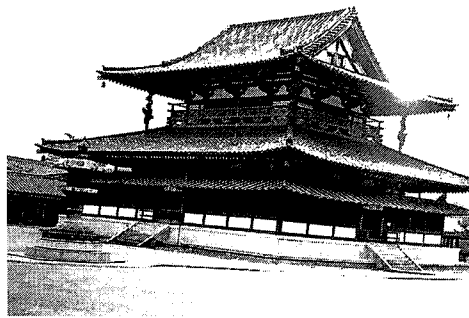
何しろ、飛鳥時代の遺産が大  
 量に、良好な保存状態で伝世す  
 る。奈良時代の遺産も中・近世  
 の遺産も途切れることなくあ  
 る。しかも、時代を代表する傑  
 作ぞろいである。

国宝三八件、重文は一五〇件  
 を数える。未指定の宝物は無数  
 である。法隆寺は、これらの  
 宝物の全てを調査して記録す  
 る「昭和資財賬」づくりを昭和  
 五九年から進めているが、いつ

までかかるか分からない状況  
 だ。

西院伽藍の金堂、五重塔、中

法隆寺金堂



門、大講堂、鐘楼、経蔵、回廊、  
 聖霊院、食堂……。東院伽藍の夢  
 殿、伝法堂……。境内に立って目  
 にとまる建物はことごとく国宝  
 である。

この比類なき文化遺産も、幕  
 末にはガタガタに近い状態に  
 なっていた。明治の廃仏毀釈が  
 荒廢に拍車をかけた。このため、

法隆寺五重塔



昭和九年から同六〇年まで、国  
 家の事業として半世紀がかりの  
 「昭和大修理」が行われた。

戦時中も途絶えることなく続  
 けられた大修理は、伽藍の威容  
 をよみがえらせたばかりでな  
 く、我が国の文化財の研究や保  
 存にきわめて重要な意味を持つ  
 多くの「副産物」を生み出した。  
 解体した部材の調査や関連の  
 地下調査で、『法隆寺の謎』が  
 次々と解明された。古代建築技  
 術の研究にも数え切れないほど  
 の成果を上げた。古建築の修理  
 法や修理技術も大修理を通じて  
 確立された。柱の穴を探し出し  
 て掘って柱建物遺構を掘り起こ  
 す、今日では常識化した発掘技  
 法も法隆寺で開拓された。

昭和二四年一月廿六日、解体  
 中の金堂で火災が起きた。上層  
 は取り外され、仏像も別棟に移

されていて無事だったが、日本  
 絵画史の至宝だった内陣十二面  
 の壁画が焼けた。民族の痛恨事  
 だった。この火災が契機となつ  
 た文化財保護法の制定もまた  
 「副産物」の一つだった。修理  
 建造物は国宝十九棟、重文三六  
 棟



《救世観音菩薩立像》夢殿安置  
 像高一七八・八センチで太子  
 等身の像と伝える。飛鳥時代の  
 作で国宝、北魏様式の木造、神  
 秘的な微笑でも知られる。

鎌倉時代から完全秘仏だった  
 が、明治十七年、フェノロサと  
 岡倉天心が白布を解いて開扉し  
 た。ところが、二人の開扉を示  
 す明確な記録がないことなど  
 から、これを否定する見解が  
 高田良信、法隆寺執事長から出  
 されている。厩戸皇子（聖徳太  
 子）薨去、推古三〇年（六二二）

蘇我馬子他界、推古三四年（六一六）推古天皇<sup>③</sup>崩御、推古三六年（六二八）

その後、蘇我入鹿（蝦夷の子）の独裁専横が激しくなった。中臣鎌足は蘇我氏の「王権無視」に対する人々の反感をバツクに密かに入鹿打倒を決意した。英明の王とらんだ若きプリンスに近づいた。たまたま飛鳥寺の榎の木の下であった蹴鞠の会で脱げ落ちた大兄皇子の靴を拾って、うやうやしく奉って以来、二人は意気投合するようになったと伝える。皇極四年（六四五）、大化元年六月十二日、その日は三韓（高句麗、百濟、新羅）から調が献上される日だった。

大極殿に、皇極女帝<sup>③</sup>をはさんで古人大兄皇子、蘇我入鹿らが居並んでいた。蘇我倉山田石川麻呂が三韓の上表文を読み上げ始めた。中大兄皇子は、十二の宮城門を一齐に閉鎖させ、長い槍を持って大極殿の脇に隠れた。中臣鎌足らも弓矢を持って中大兄皇子を護衛した。佐伯連子麻呂と葛城稚犬養連網田に剣

を受け、一気に斬りつけるように命じた。

上表文を読み上げる石川麻呂は汗びっしり。声は震え、手はわなないていた。ふと不審に思った入鹿が「どうしてそんなに震えているのだ。」天皇のおそばで恐れおののき、思わず汗をかいてしまったのです。

子麻呂らは、恐れてなかなか斬りかかろうとしない。しびれを切らした中大兄皇子が「ヤア」と叫んで躍り出た。入鹿の頭と肩に斬りつけた。子麻呂も続き、足を切った。もんどり打って倒れた入鹿は「私が何の罪を犯したというのでしょうか。」と女帝にしがみついた。驚いた女帝は「いったいどうしたのです。」中大兄皇子は「鞍作（入鹿のこと）は皇位を絶とうとしています。皇統を滅ぼしてはなりません。」女帝は何も言わずに席を立った。子麻呂と網田が入鹿を斬り殺した。翌十三日、蝦夷が自刀した。（乙巳の変）

ここに六世紀半ばごろからおよそ百年間、大王権の外戚とし

て権力をほしいままにしてきた蘇我本宗家が滅亡した。

大化の改新がクーデターによる単なる政権交代ではなく、新冠位の制定、役人の出勤や朝参の規定、冠や服の形と色の規定、墳墓造営の規制、元号の制定、習俗や慣習の統率も進めた。中大兄皇子と中臣鎌足が政治の実権を握り、改新政治を行った。

孝徳天皇が亡くなった翌年（六五五）元皇極天皇<sup>⑤</sup>だった宝皇女が再祚（重祚）して齐明天皇となった。

六六二年、中大兄皇子が称制（即位式をあげずに天皇となること）して天智天皇<sup>⑧</sup>となった。

六六三年に百濟の要請を入れて、九州、四国、関東、東北、全国から動員して大量の水軍を派遣したが、伯村江の戦いで新羅と唐の大軍に大敗北した。

その敗戦から四年後の天智六年（六六七）十月に都を近江の大津宮へ遷した。翌年の正月、天智天皇は即位式をあげ、やっと正式に皇位についた。

天智十年（六七二）九月、天

皇が病に倒れた。宮中で百体の仏像を開眼するなどして回復を祈ったが、病状は悪化するばかり。十月十七日、大海人皇子を寢室に呼び入れた。「私の病は重い。後事を頼みたい。」と次の皇位をほのめかした。しかし、大海人皇子は固辞。「私は病気がちで国家を保つことはできません。皇后にお任せになり、大友皇子を皇太子として政務全般を執り行わせなさいませ。私は出家して仏道を修めたいと思います。」大海人皇子はその日のうちに髭と髪を剃り落とした。そして、翌々日、大津宮を退出、途中、嶋宮（明日香村）で一泊、二十日、吉野へ入った。人々は「虎に翼をつけて放つようなものだ。」と言いつつ合った。

天智天皇は十二月三日、大津宮で四六歳の波乱の生涯を閉じた。翌年（六七二）に大海人皇子が挙兵、一ヶ月後の七月二四日に大津宮を落とした。古代史上最大の内乱に勝利した大海人皇子は飛鳥に凱旋、六七三年二



月、浄御原宮で即位した。古代律令国家体制を確立した天武天皇である。

大君は神にしませば赤駒の腹這う田居を京師と成しつ

大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を皇都と成しつ

二種の万葉歌は、壬申の乱に勝利した大海人皇子が飛鳥に凱旋して都づくりを進める様を詠む。都は、言うまでもなく飛鳥浄御原。神と歌われる大君は、六七三年二月二十七日、同宮で即位した天武天皇<sup>④</sup>天武は、治世十四年の間に絶大な天皇権力を確立し、律令国家の体制づくりを進めた。

壬申の乱で伝統的な畿内の大豪族は近江側にあつた。このため、天武勝利は大豪族の中央政治からの排除を意味した。ここに、従来の大豪族連合政権的体制から抜け出し、天皇独裁への道が開かれることになった。

天武は大臣を置かなかつた。もつぱら、皇后鸕野皇女(後の持統天皇)と草壁、大津ら諸皇子が国政を補佐した。

豪族たちの官僚化に意を尽くした。受け皿として大弁官、六官(法官、理官、大蔵、兵政官、刑官、民官)などの官庁組織を整えた。

また、各豪族の土地、人民の私的支配の制限に努めた。

「天皇」号自体も天武朝に確定したといわれる。

「凡そ政の要は軍の事なり」(天武十三年の詔)と、軍事力の統制にも力を注いだ。

「畿内、七道の制」を定めるなど、地方行政組織の整備にも力を入れた。

たまたま太陽神を祀っていた伊勢神宮を国家の神、天皇家の神とした。思想、文化、宗教までも国家統制した天武政治は、持統三年(六八九)完成の飛鳥浄御原令に結実。さらに七〇一年の大宝令施行につながり、律令国家体制の礎となった。

明治維新は、多分にこの天武政治を手本にした。天武政治は歴史を一步も二歩も推し進めるものだった。

七二四年(神亀元年) 元正天

皇<sup>④</sup>は譲位し、皇太子首皇子が即位して聖武天皇<sup>⑤</sup>になった。

国分寺の造営に続いて、聖武天皇は、華嚴経の教えに基づく盧舍那仏造立の意思を抱き七四三年(天平十五年)十月十五日、

離宮のあつた近江の紫香楽村で大仏造立の詔を下した。大仏の設計、立案から実際の铸造まで、技術面全般にわたる指導者は、国中公麻呂という人である。

七四五年(天平十七年)八月、基壇造りより始まり、七五六年(天平勝宝八年)五月、聖武太

上天皇が死去する頃まで続く。そして、大仏殿の一郭の最終的な整備は、翌年五月の聖武の一周忌を目指して完成が図られた

ようである。七五二年(天平勝宝四年)四月九日に行われた大仏開眼供養会の時点で完成していたのは頭部のみで、首から下はまだ補修の最中であつたとみられる。

源平騒乱期の一一八〇年(治承四年)平重衡の南都焼き討ちによって天平期の東大寺はほとんどが灰燼に帰してしまっ

た。辛うじて残つたのが、正倉院と転害門などである。大仏も首と手が落ちたが、俊乗房重源の勧進と宋から来日した技術者陳和卿の努力によって復元が成つて、後白河法皇が開眼供養会を執り行い、また伽藍も源頼朝の支援によって復興を遂げたのである。しかし、一五六七年(永祿十年)の三好、松永両氏の争いによって東大寺は再び兵火にあい、今度は首や手はおろか胴体も半分が崩れ落ちてしまった。その後、不完全な形で再建を経て、公慶(江戸時代中期の東大寺の僧)の勧進によって復元され、三度目の大仏開眼供養会が行われたのは、一六九二年(元禄五年)のこと。一七〇八年には大仏殿も再建され、今日見るような姿が完成した。

# 老人が憂う「由良の将来と希望」

中西 六右衛門

二〇一六年一〇月二五日

第二次大戦を中心に生きてきた昭和生まれが大半の「由良人」私も八〇歳。

平成二八年六五歳以上が約五〇パーセントになった現在、その仲間にとつては、平成になつてから高々三〇年だが、無理に三〇年後の由良を考えてみるとしよう。

由良の人口はつい最近一二〇〇人と聞いたように思うが、何年もたたずに現在平成二八年九月末 一一一四人と八六人減少している。この処毎年三〇人前後が死去していると聞くが、あと三〇年すると単純には由良の人口は二〇〇人前後になる計算になる。

その残った六〇歳以上の人間が現状と将来を変えることは不可能に近いと推察するのは容易に思えるが、現実の三〇年後はどうか?と想うと。

由良地区には継続した夢と希

望の「由良ビジョン」は無く、空き地は精々無機学的な太陽パネルに埋め尽くされ、それ以外は荒廃した原野になつて居よう。田畑は虫食い状態で放置されブタ草で覆いつくされているであろう。

学校は無し、診療所無し、商店無し(採算が合わなく撤退する)、公的機関無し、このような土地にどうして若者が来るか?子供を作るか?Uターン、Iターンすら考えられない、現住民の将来は生活難民しかなさそうである。本当の超過疎になりそうである。

荒れ果てた山、山林は自然倒木し自然淘汰され広葉樹林(自然林、荒れ山)になり、畑は殆んど放置され荒廃畑、丹後由良駅は残つても乗降客は殆んど無し、三〇年経過した太陽パネル(固定資産税プラス〇〇円程度の貸地料が入り、所有権は残る。

現状では良い決断と思う)は老朽化し更新の時期になりつつも輝いて居るかも知れない。

由良地区は空き家が全体の半分、住居は一五〇軒か?その残った五〇軒に各戸二〜三人が住み、後の一〇〇軒に独居老人がポツポツと散見され孤独死をじつと待っているのは考えるだけでも悲惨である。老人ホームは満杯、諸事情で入居出来ない老人たちを地区民は同情し可哀そうだが仕方ないと見ているだけになりそう。

マイナス発想で三〇年後に思いを馳せては見たが、無念、残念では何も変わらず、変化することを夢想でも良いから地区民が考えてみることから出発する以外変化は向こうからはやって来ないであろう。

さて、考える前提条件は、一、三〇年後の現実を考える事。

二、継続して考え続けられる組織を作る。

三、毎年現実を見て提案する。

四、その提案を具現化できる組織と人脈を作る。人材の養成も必須。

五、全てを地区民に公開し、自分達の村として協力を得られる体制を作る。

六、行政の協力を取り付けておく。官民一体が全ての基本である。

七、その他、諸々はその都度考える、としよう。

先ず、三〇年後の由良を念頭に置いて、将来設計をして見る。

土地建物は、一度所有すると国家にお返しする「所有権放棄」は出来そうに無い。(相続の時、全員が所有権放棄をすれば土地は国家へ返却出来そうだが)一生末代放棄は出来ず固定資産税を払い土地建物の環境整備を続けなければならぬ事になる。周囲の苦情を無視すれば別だが、住まなくなつた建物、荒廃した山林と田畑どうするか?考えて見ると悲惨である。土地は買うとなると価格が付くが、売るとなると只に近い価格になつて居るであろう。

土地付きの荒廃家屋と土地はゼロ円。田畑も山林もゼロ円。ゼロ円から出発してみる。何故なら、住む人も耕作する人も居なくなれば需要ゼロ、価格もゼ

口になる。

それでは情けない、もつたない、置いとけば税金と諸経費が掛かる。近所迷惑、環境悪化、それを防ぎつつ良策を考えねば進展しない。

そこで「創造開発会社」を行政と民間(有志)で設立し、受け皿になるとしよう。その前提はゼロから出発、昭和五年から三〇年に生まれた者が平成二八年間がアツと言う間に経過したように、今後の三〇年も短いと考えて悲観と楽観の交錯した夢を描くのも又楽しかろう位の思いで描かねば先き行かないと思う。

### 三〇年後の夢

ニューフロンティア、新しい村を作る。

(一) 由良駅周辺に、五〇人程度入居可能な集合住宅を作る。二部屋とバス、トイレ、台所付きの各戸独立になっている。食堂を持つ地区集会所が出来、住民の憩いと交流の場になっている。買い物難民防止策として、週三回の近隣のスーパー食料品福祉号が巡回し、宮津市への衣料等買ひ物の福祉買ひ物バスが

週二回出ている。

(二) 診療所は残り。週三日の往診と診察をしてもらっている。

(三) 郵便局は地区唯一の公共金融、行政機関として残って住民相談の窓口にもなっている。

(四) 全戸を再配置編成し新しい隣組制度で連携を保ちつつ、福祉民生委員等によるきめ細かい援助は受けられる。

祝い事は勿論、入院、終末医療、葬式迄の安心フォロワー体制が出来ている。

(五) 二〇一〇年代から植え続けた「由良オリーブ」は、三千本を超す本数となり、豊かに実をつけ摘果は定年(六五歳)後の住民の副収入になっている。「由良オリーブオイル」は、

名産品になり創造開発会社の大きな収入になっている。

(六) 守り残してきた「由良ミカン」は、秋の名物となり観光と交流の果樹園となっている。専業農家(農家組合)の収入源でもある。

(七) 耕作困難な中、守ってきた田圃は約二〇町歩、専業農家四〜五人が耕作し、良米は地区

民の食となり余剰米は出荷し共に相当の収入源になり、余力は、オリーブとミカンと中山間部の保持とフェンスの管理で先ず先の生活をしている。

(八) 山林は全て森林組合に寄託し、全てを計画的な管理をしてもらい、以前の植林管理して来た立木は、伐採時に相当の対価を元所有者に還元しつつ全体としては森林組合に一任し、将来の所有権を放棄する。その結果計画的に守られた山林となっている。

(九) 荒廃した畑は、宅地並み課税と義務とされた管理(オーストラリアの様に、荒廃した土地は行政が代行整備し、その代金を所有者に負担させる)により整備されているか、それが出来ない畑は、会社に寄託し地区で有効活用している。農家組合の計画農園と家庭菜園とか団欒広場とかに。

(十) 空き家は、原則内部整理して宮津市の空家バンクに登録して頂き、次の有効活用を待っている。放置した空家は固定資産税は新築並みか二倍以上を戴き、防火防災の注意建物として

会社が外観チェック管理する。これに協力せず荒廃する建物は、行政が管理命令を出し、次は取り壊し命令を出せるようになっていく。空き地は会社へ寄贈し有効活用されている。

地区民は安心出来る環境の中で生活している。

(十一) その他、諸々・良いことが散見できる。

Uターン、Iターンは少しずつ増え、人口も増加に転じている。よかった!!!

### 【追記】

この原稿を書き上げた十月から大分日時が経過します。

その間に由良地区自治連合会では、「里力再生計画」を発行し、将来の方向性を示唆されていることを知りました。

また「由良を良くする地域会議」では、其の後具体的に行動され、一步一步改善前進されている様子を将来の光芒を感じています。

有難うございます。

## 四十七年間に渡る スイスでの生活を振り返って(一)

セバーク由良住民 高橋洋 二

由良宮本に移転してから本年の四月で早や三年、妻共々、念願だった海の見える終の棲家を由良に見つけスイスのジュネーブ州より移転して以来、実に一日として同じ表情を見せない若狭湾由良海岸の海の変化を飽く事無く毎日眺めながら治安が良く親切で優しい村の人々に恵まれ、日々平和で満足な生活が送れる、「今」という至福の時を日々感謝し、自分の人生の半分以上の生活をさせて頂いた、私の第二の故郷でもあるスイスと云う九州程度の面積と、約七百六十万人の人口を擁する永世中立国、欧州共同体にも加盟せず、今なお陸の孤島を維持し、スイスフランという強い通貨を用い、欧州内でも屈指の経済力を維持し、物価も高いが給料も良く、欧州内でも高い生活水準

を満喫しているスイス国で、長年生活体験をさせて頂きました事には、同国への不思議な縁を強く感じます。ジュネーブ生まれの三人の息子達も永住し、今も日々お世話になっている同国に対しましては、日頃より尽きせぬ、感謝の念で一杯の心境です。

思えば、今から丁度五〇年前に遡る昭和四十二年一月初旬当時横浜港より、地中海沿岸に位置するフランス屈指の古い港口、マルセイユ間を定期運航していた定期客船に乗りスイスへと向かいました。最初の寄港地は香港、それから、順次、フィリピンの首都マニラ、タイのバンコック、シンガポール、マラッカ海峡を渡りインドのムンバイ(ボンベイ)、スリランカの首都コロンボに寄港し、それから一

気にインド洋を横断し、東アフリカと中近東に挟まれた幅の狭い紅海を進み、突き当たりの地スエズ運河に到着しました。紅海は、幅が狭く両岸は赤茶けた砂岩の連続で、緑も無く、生き物の気配も全くなく、どんよりした海面には、波も無く始めてみる不気味で、不可思議で神秘的な荒涼とした別世でした。スエズから対岸の地中海へ向かう沢山の貨物船が順番待ちの為約一昼夜の待ち時間を利用し、同船者たちと一緒にエジプトの首都カイロ観光に参加しました。ナイル川に面したホテルで昼食後、人々で賑うバザール、ギザに在る人の顔を持ち身体はライオンのような不思議なスフィンクスとピラミッドを始め膨大なエジプト古代王朝の発掘遺跡を展示するカイロ国立博物館等を見学、夜は郊外の砂漠に設営された大テント内で、中東の粒揃いの美女たちが、怪し気に踊るオリエンタルダンス(お臍を出して踊る艶めかしい腰振りダン

ス)のショー付き夕食会が真夜中過ぎまで催され、若い自分は、大いなる刺激に度肝を抜かれ、本当に困惑しました。遅い夕食後は、ひたすら地中海側のポートサイドの港に向かってスエズ運河沿いの真暗闇の街道をバスでひた走り途中で自分たちの船を追い越し、地中海側のポートサイドの港で船と合流し、そこからは一気にマルセイユの港まで一昼夜かけて到着しました。香港以南の東南アジア、インド洋、紅海の突き当たりスエズまではエジプトも含め、夏の気候でしたが、地中海に入った途端に冬の気候となり心底驚きました。二月九日無事にヨーロッパ大陸の最初の土地マルセイユ港に上陸しました。その日の内に、鉄道で地中海沿岸の保養地、ニースの町に移動し一泊、夜は華やかな大カジノを見学、翌日はニースの空港から、飛行機で、ヨーロッパを飛び越え、私が人生の半分以上を過ごす事になる目的地ジュネー

ブの空港に無事到着しました。三〇日以上に及ぶ長旅がようやく終わった訳です。それは、昭和四二年二月十日の事でした。

着陸態勢に入ったレマン湖上空から見るジュネーブの町は珍しく、自分の予想以上に、整然と美しく、静かな佇まいでレマン湖の西端に位置するジュネーブ州はフランス国と陸続きであり、所々には、モヤが煙り、これが想像していたヨーロッパの箱庭と呼ばれるスイス国の一地方都市ジュネーブなのかと湖岸に佇む、その冬景色は誠に強烈で、今でも私の脳裏にしつかりと焼き付けられております。

その時の感動と印象は、生涯の思い出となっております。

思えば、横浜港を出港して以来若かった自分にとつての、異常な興奮を伴う旺盛な好奇心は、毎日、見る物、食べる物、途中の港で乗降船するアジア人達又、食事中のお皿が容赦なく横滑りする強烈な船特有の揺れによる吐き気と食欲不振の船酔

い体験、そして各寄港地での約二十四時間程度の停泊時間を利用しての寸暇を惜しむ市内見物等々、怖いもの知らずの当時の若さを思い出すと、冒険心と好奇心と無鉄砲だった自分の青春時代、そして全く無防備な危うさだった当時の自分を思い起こし本当によくも命を落とさず、無事に由緒ある由良の良き土地に運よく辿り着いたものだと、当時に思いを馳せながら、満七十三歳となった今、自分の未熟で若かりし頃の姿を思い起こし、誠に感慨深いものが有ります。苦しかった事も多々ありましたが今となつてみれば、全てが懐かしく、良き思い出、貴重な体験となりました。その後、二度と繰り返す事の出来ない四十七年間に渡るスイス生活の始まりとなった、自分史内の追憶の一駒の宝となつている事を、時折、由良の海を眺めながら、とめどなく懐かしく思い起す事の有る今日この頃の心境です。

## 短歌

柗本 清

中継所禱つないで倒れ込む

鍛え重ねた箱根駅伝

山半ば薄化粧の雪白し

綿雪霏々と横なぐり寒!

幾度か通い慣れた奈具街道

若葉の芽吹き汐の香ほんのり

萬福寺足早や行き来の僧侶たち

友と食した精進料理

空高し馬の背に似た由良の山

橋立に向け走り出しそう

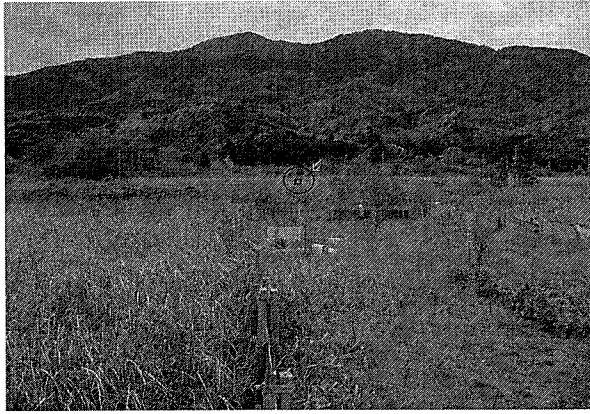


# 寺社その他編 No.3

由良の歴史をさぐる会 加藤 正一

これは何

宮本地区の畑や田んぼに囲まれ、駅から、電車から、旧校庭から見える小さな社。(円内)それは通常「弁天さん」と呼ばれているようだが、正式には



棟札より  
いちきしまじんじや  
市杵島神社!



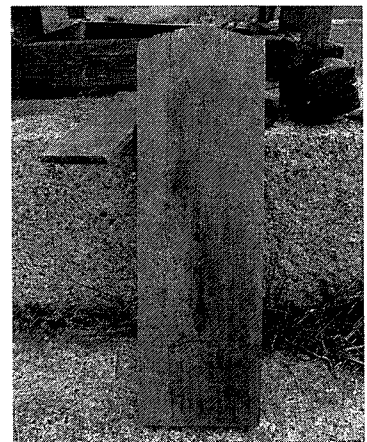
狛犬

国家隆盛 昭和拾年  
奉市杵島神社再建棟札  
村内安全 三月二十八日



(縦45.5cm 横13.5cm)

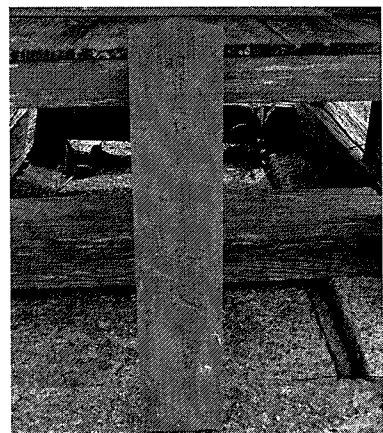
の棟札が残されている。



棟札の裏側は長年風雨にさらされごく一部しか判読できない。期待を込めて舞鶴郷土資料館の厚意で赤外線カメラで調べていただいたが状態が悪く目視以上の判読は無理であった。私が目視で読めた部分を記す。

「奉.....  
.....昭和九〇九月二十一日朝突如.....  
近畿一帯ヲ襲ヘル大猛風雨ノ為當社亦.....  
倒壊ノ災ニ遇ヒ.....未聞.....此ノ復旧.....  
以.....昭.....上様.....  
.....村民.....  
.....奉.....

とほとんど読めないが正誤は?



明治十六年末 十二月  
祭主 今城信保  
(縦・36.2cm 横・上側9cm、下側6.5cm)

各地にある一般的な市杵島神社の祭神は市杵島姫命又は弁才(財)天と云われ江戸時代には勝運守護の神様として又財宝神として武家から庶民にいたるまで広く信仰を集めていたそうである。注目すべきこととして水神や、海上神の市杵島姫命と神仏習合して、池、泉、島、港湾の入り口などに弁天社、弁天堂として数多く祀られた。

いずれも海や湖や川などの水に関係している。この小社は何と関係しているのだろうか、川又港敷地内に緑色凝灰岩で作られた真言宗に特徴的な金剛杵を持った石仏が六体ほど草むらにある。このことは明治十六年の奉納札以前（おそらく江戸時代）神仏習合時代から存在していた。しかも現在もその状態が維持されている珍しい小さな社であるが、鳥居（片？）狛犬（一体のみで型が崩れている）も備えていた立派なものであった様子がかがえる。



島木十笠木



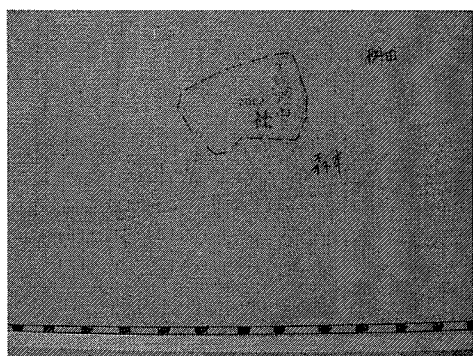
台石十柱



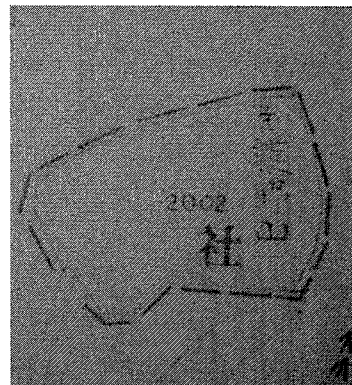
明治十六年の奉納札から市杵島神社は今城信保氏が祭主を務めている。昭和の中頃まで由良神社の神主を務められていた今城氏との関わりから、由良神社前身の熊野神社に属していた事が考えられる。すなわち如意寺に属していたと云えるのではないか。

発見

平成二十八年九月十四日に法務局より取り寄せていたM氏よりK氏を介し頂いた地籍図を良く見れば



「字 熊野山2002 社」



由良神社の社伝によれば前身の熊野神社には上ノ宮、中ノ宮、下ノ宮があり、現神社は中ノ宮にあるとのこと。下ノ宮の位置は地区の人が言われる（小字は熊野山、線路より山側）と異なるが、もしかしたらこの社地も小字は熊野山で「社」とありこちらの方が下ノ宮ではないだろうか。（線路の山側では下ノ宮が中ノ宮より上ノ宮側にあることになり不自然に思う）この神社への参道はどこに。管理者は？ 再建後八十年以上も経っているのに破損も激しい。維持補修も含め今後の課題である。

## 慕情

### 小西 衛

（あの空に浮かぶ雲は今日の雲 それは昨日の雲じゃない いく度も父から言われたが すれ違う日々がつづいていた）

詩・小西 衛

お父さんが元気でいるのなら、僕は正面に行つて、跪ひざまずかなければなりません。多くの無礼をお詫びしなければなりません。僕が三歳の時にお父さんは脳腫瘍になり、死を覚悟した手術が成功し、奇跡的に助かりました。

京都大学医学部付属病院で神の手を持つ先生と献身的な看護婦さん、それに国鉄労働組合の両手を合わせた経済的支援によつて、お父さんは助かりました。本当に良かったよね。もちろん大手術だったので、体は不自由になりましたが、心は不自由とは言えなかったのです。だ

から僕は小学生時代に人権を考える人間になっていましたね。日本大学時代には三千人が集まった日大講堂で基本的人権についてスピーチしたことだつてありました。拍手の渦でしたよ。そんな正義感のある僕だったんだけど、だんだん東京（激流）というキラキラした銀河に飲み込まれ、自分を見失うダメな男になってゆきました。

そして、それからのお父さんは、二年間のブランクの後、福知山鉄道管理局内宮津駅保線区に勤務となり、社会復帰しました。お父さんは家族のために、不自由な身で精一杯がんばってくれましたよ。そんなお父さんの壮絶な努力を思おうともせず生きてきた気がします。僕は思いやりがちよつとしかない、人間のクズだったのでしよう。

銀河の東京（激流）時代は、不景気でも、なぜか高層ビルがあちこちで建てられ、さらに薬局がいつの間にか、コンビニになつたりして、見るものすべて銀河でしたよ。又、赤坂プリンスホテルから紀尾井町周辺は、世界四大夜景（銀河）の一つに数えられたりして、本当に東京は変なところでしたね。

そして東京（激流）時代には、お父さんのことをこのように思つてましたね。「僕一人でやったことだつて、たくさんありましたよ。」と、そんな僕だったんだけど、銀河の東京（激流）からおだやかな愛に包まれる由良に帰つてきて、間もなくしてお父さんが亡くなつて、やつと気づかされましたよ。「甘つたれていたんだ。」と、さらに由良に帰つて来たころから僕は自分に正直になつてきて、愚かな自分を声にして、時には人目もはばからず、無念の涙を流すこともありましたね。「ごめんなさい。お父さん」〇〇〇〇この

丸印は僕の涙です。

今、お父さんの家族でいたことを誇りに思える僕だから、こうしてエッセイを書いていきます。

二十歳の力（男は、あくまで夢見ようもの）が、永遠のものと信じていたならば、今でも東京（激流）で生きていた（泳いでいた）ことでしょう。しかし、お父さん、僕は大丈夫ですよ。かなわぬ願いは求めすぎずに、運命の清流という名の由良街（例えば、由良駅にヤギがいる。それにコンビニや安寿亭、さらに安寿の里のイスやテーブルまでもがカワイク感じてきた界隈）で生きてゆこうと思えます。それにはどのように生きてゆけばいいのか？分からないのです。

お父さんに会いたい。  
お父さんの声が聞きたい。

第三十四回宮津市民卓球大会  
(強い由良チーム)

十二月四日 宮津市民体育館

【団体戦】

自治会A級の部 優勝

「メンバー」

小林美香さん、木村大祐さん  
日比道栄さん、川崎 清さん  
藤井 忠さん

自治会C級の部 三位

「メンバー」

小林久美子さん、前畑衣江さん  
中西一義さん、熊田良雄さん

【個人戦】

一般男子C級の部

三位 熊田良雄さん

一般女子A級の部

優勝 日比道栄さん

準優勝 小林美香さん

一般女子C級の部

準優勝 前畑衣江さん

由良ヶ嶽登山者数

平成二十八年一月一日から平成二十八年十二月三十一日まで一年間に発行した登山証明書数は六百二十枚でした。

今年の一月一日、一枚発行されていきました。一月二日、家族四人で由良ヶ嶽へ登ってきまし

た。登り口までに一名、登ってこられたと思われる男の方に出会いました。登山証明書はNo.2からのままでした。山頂で別の男の方に出会い、登山証明書を持って帰っていただくように話をしましたが、持って帰っていただけていません。山小屋に登山証明書があることがわかりにくくということがわかりました。

一年間には登られた方の多くに登山証明書が発行できないでいるということ。実際に何名の方が登られているのでしょうか。

千名に近いかもしれません。由良ヶ嶽(関西百名山、丹後富士)は、由良地区発展の資源であることに間違いはないでしょう。



平成28年度 宮津市人権標語優秀作品

ちがうこと あってもなくても おともだち (小学1年生)

はいどうぞ この手でよければ つかってね (小学2年生)

やさしさで ぼくもみんなも につっこにこ (小学3年生)

編集後記

2017(H29)年3月  
◎平成29年の幕開けは穏やかな天候で始まりました。1月14日には、「数年に一度の強い寒波」が入り込んだ影響で、日本海側を中心に大雪になりました。15、16日も強い冬の気圧配置が続き舞鶴市で33cm、上世屋で77cm、由良では50cmの積雪量となりました。京都縦貫自動車道も一時通行止めとなりました。一週間後の24日も府北部を中心に大雪に見舞われ大雪警報も発令されました。地区内では「もううんざり」の表情で玄関先や駐車場の雪かきをする人たちの姿が見られました。

◎日本老年学会が高齢者の定義を75歳以上とすべきだと発表しました。「今の65、74歳の大多数の人は以前と比べて、心身共に若くなっている」という理由です。65歳以上を高齢者と定義したのは、60年前の国連の報告書が契機とされています。当時の平均寿命は男女とも60代。現在は80歳代に伸びています。年をとっても元気な人たちに「社会を支える側」として、もっと活躍してほしい」というのが、提言に込めた願いだと思います。

(枝川)